腎実質性悪性リンパ腫様組織所見で腎不全を来たし、剖検の結果川崎病様冠動脈瘤の発見された成人の１症例

京都大学医学部第三内科
藤　原　久　義

要約：腎実質性悪性リンパ腫か間質性腎炎かの組織学的鑑別か困難であった腎不全を有する24才の男子で、剖検後左右冠動脈に大型の冠動脈瘤があり川崎病後遺症が疑われた成人の１症例を報告する。

見出し語：腎不全、冠動脈瘤、川崎病後遺症、成人

症　例：24才　　男
主　訴：発熱、左下肢の浮腫。
家族歴：特記すべきことなし。
既往歴：３才　ハシカ、23才　慢性肝炎
現病歴：死亡１年前熱発。両腎腫大、腎機能低下あり。腎生検にて悪性リンパ腫が疑われたが、間質性腎炎も否定できなかった。ＣＨＯＰ療法等により症状軽快したため退院。死亡５カ月前より発熱、左下肢浮腫が出現。腎機能も悪化したため再入院にて透析を開始。死亡３カ月前に２回目の腎生検。各種抗ガン剤、抗生剤、γ－グロブリン等の治療にかかわらず、敗血症、出血傾向進行し、死亡。この間、胸痛は一度も見られず。

現　症：168cm、60kg、ＢＰ 146/104mmHg、ＰＲ 112/分、全身のリンパ節腫大。ＲＢＣ 442万、Ｈｂ 11.5g/dl、ＷＢＣ 7400（好中球80％、リンパ球14％、後骨髄球metamyelocyte １％、骨髄球myelocyte １％）、血小板12.6万、creatinin9.4 mg/dl、ＢＵＮ 122mg/dl、クリアチニンクリアランス＝ 0.5ml/分、ＥＢ virus 抗体価：強陽性

剖検所見：腎にはＴ cell からなるリンパ球の浸潤があるが異型性は少なく悪性リンパ腫とは確定できない。心：左右冠動脈主幹部に直径約10mmの動脈瘤、心筋梗塞。

考　察

１．本症例は腎病変を悪性リンパ腫と考えて治

療したが、間質性腎炎であった可能性もある。

2．本症例の冠動脈瘤はその形態的特異性より小児期の川崎病後遺症の可能性がある。20年前は川崎病の診断は一般の医者には困難な時代であり、例えば4才のときのハシカが川崎病であった可能性がある。しかし、最近、EV virus感染症で冠動脈瘤ができるという報告もあり今後の検討が必要である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:腎実質性悪性リンパ腫か間質性腎炎かの組織学的鑑別か困難であった賢不全を有する 24 才の男子で、剖検後左右冠動脈に大型の冠動脈瘤があり川崎病後遺症が疑われた成人の 1 症例を報告する。